

# 韓国訪問の報告

別府大学文学部人間関係学科  
准教授 長尾 秀吉

## ① 韓国訪問の目的

平成26年3月11日から14日の四日間、別府大学の姉妹校である韓国の大邱科学大学と慶雲大学校および釜山市を訪ねた。韓国訪問の目的は、一つには地域社会政策に関する研究交流を通じて今後の地域社会政策に役立つ知見を得ることである。昨今、日本ではグローバル経済拡大のひずみが地域社会の中で様々に顕れている。とりわけ、個人だけでなく地域社会ごとの所得や機会の格差の拡大は目に見えて大きくなっている。こうした中で、教育や福祉、若者の就業などの面で問題があらわれている。韓国もまた日本と同じように格差の問題を抱えており、どのような問題があらわれ、どう対応していこうとしているのだろうか。将来的に両大学の研究者との関係を深めていくことで、相互に知見を広げていけることができると考えている。二つ目の目的は、各大学の教育や設備について見学をすることである。

ところで、今回は地域社会研究センターとして初めての海外訪問となることから、各大学への表敬訪問を行うことを主眼においた。また、今回の訪問では、別府大学文学部人間関係学科の学生海外研修旅行に同行した。学生たちは十名ほどが参加し、この研修旅行では両大学の学生とも交流を行っている。この学生交流についても本文で報告したい。

## ② 大邱科学大学への表敬訪問

3月11日の午前には別府大学を出発し、福岡国際空港から空路で韓国・釜山に到着した。その後、

マイクロバスで釜山市から北西に約80km離れた大邱に向かった。大邱広域市は内陸でありながら人口250万人の韓国第3の都市で、リンゴと美人の街として有名である。筆者は、10年前にソウルを訪れたことがあったが、釜山や大邱は初めてであった。釜山の巨大な高層マンション群が見えなくなると、一面松ばかりの山が続き、一時間ほどすると大邱のリンゴ畑や近代的な建物が見えてきた。

大邱のホテルに到着したのは、15時頃であった。その後、17時にホテルで大邱科学大学の学生と教職員の方々と面会した。そこで自己紹介を行い、学生は学生同士、教職員は教職員同士でそれぞれ食事を行った。別府大学側の教職員は、文学部教授のソン先生、人間関係学科の西村先生、筆者を含めた三名であった。大邱科学大学は大学企画室長・初等教育学博士のパク先生、医療福祉博士のキム先生、観光科のイム先生、そして大邱科学大学の付属高校のパク先生の四名であった。市郊外の焼肉店に行き、そこでマッコリと特別注文のハツで心温まる歓待を受けた。ソン先生とイム先生に通訳をしていただき、二時間ほど交歓した。この日は、イム先生から別府大学と大邱科学大学との交流の歴史を、室長のパク先生からは同じく交流の歴史とご自身の初等教育やスポーツ（柔道）への関心事についてお話を伺った。

12日の午前には、大邱科学大学を訪れ、パク学長への表敬訪問と学生交流を行った。パク学長への表敬訪問では、まず西村先生より学生交流についての謝辞と継続的な交流についてのお願いの挨拶を述べた。また、筆者からも、今回の訪問受け入れへの謝辞と、地域社会研究センターと大邱科学大学の教員同士の研究交流を希望する旨を述べさ

せていただいた。総長からは今後も大学間の学生・教員の交流を深めることについて歓迎のお言葉をいただいた（写真1）。



写真1 大邱科学大学パク総長への表敬訪問

その後、わずかな時間であったが、昨夜お話しした医療福祉博士のキム先生にお時間をいただき、大邱の医療福祉のお話を聞く機会をいただいた。キム先生は大邱市の福祉政策立案の委員であることから、大邱市の医療福祉計画に関わる資料をいただいた。また韓国でも日本と同様に、財政的・健康的な側面から入院の長期化を防ぎ、患者の社会復帰の途を広げる医療福祉の拡充が急務であることをお話しいただいた。

### ③ 慶雲大学校への表敬訪問とセ・マウル運動

12日の午後は、大邱から北西に40kmほど離れた亀尾（グミ）市にある慶雲大学校を訪問した。慶雲大学校は、亀尾市郊外の田園風景が広がる里地に位置し、広大なキャンパスに新しい近代的な研究教育施設が立ち並ぶ総合大学である。学内見学もバスで移動した。到着後、キム総長への表敬訪問を行った。大邱科学大学に続き、慶雲大学校でも非常に心のこもった歓待を受けた（写真2）。

特に、キム総長ご自身に、大学内にあるセ・マウル博物館でセ・マウル運動（新しい村運動：セは「新しい」、マウルは「村」の意）の解説をしていただけたことは、筆者にとって忘れられない貴重な機会となった。筆者は、社会教育・生涯学

習の観点から学習を通じた地域づくり・地域課題解決に関心を持っている。そして、韓国での地域づくりというとき、そこにはセ・マウル運動の存在は欠くことができないものである。しかも、慶雲大学校は、理事長を中心に、現在もセ・マウル運動の中核を担っているということであったため、ぜひとも慶雲大学校でセ・マウル運動のお話を伺いたいと思っていた。理事長とともに長くセ・マウル運動に関わってこられたキム総長のお話にはとても感銘を受けた。



写真2 慶雲大学校キム総長への表敬訪問

セ・マウル（新しい村）運動は、現在のパク・クネ大統領の父親であるパク・チョンヒ元大統領（1963-1979年）が、1970年に全国地方長官会議で提唱したのが始まりである。「全住民を自発的な運動に参加させ、精神革命を起こす」、「社会開発を通じて住民がより暮らしやすい村で、福祉生活を楽しむ」、「経済開発を通じて村の労働生産性を向上させ、個人所得を高める」ことを目標としたこの運動は、朝鮮戦争の疲弊と緊張が続く中、韓国の国土開発と経済成長をはかるために、1971年から全国的に展開された。「勤勉」「自助」「協同」をスローガンに、農民の生活の革新、環境の改善、所得の増大を通じ、それまで経済開発から取り残されていた農村の近代化が図られた。具体的には、国内で産出されるセメントが村に配給され、道路や公共施設の公共事業実施によるインフラ整備と経済の回復が行われた。また、村だけでなく職場セ・マウルや学校セ・マウルなど生活の隅々に団体が組織され、社会整備や生活の合理

化・近代化が目指された。この時期の経済政策の成功により韓国経済は急速に成長し、今日に至る。

ところで、この運動の源流には、戦前の日本の社会教育が大きく影響している。戦前の日本では1908年に戊申詔書が出され、地方改良運動が始まった。この運動は、日清・日露戦争で疲弊した国内の立て直し、特に財政基盤の弱い町村自治体の財政強化運動である。具体的には小学校を中心に青年団・処女会・婦人会など地域団体が網羅的に組織され、二宮尊徳の報徳の精神に基づいて、住民自身による社会貢献・生活向上が目指された。その後、地方改良運動は、教化総動員運動（1929）、農村経済更正運動（1930）に継承されていくが、この運動を所管するのは文部省の社会教育局であった。パク大統領は、朝鮮併合時代に教師、後に軍人として教化運動を知り、これをモデルに実施した。

筆者が関心を持っていたのは、高度成長を成し遂げた80年代以降のセ・マウル運動であった。そして、キム総長ご自身から、その後についてお話を伺うことができた。それによれば、韓国国内での運動は以前と比べて行われなくなったが、セ・マウル運動は、現在、世界中に広げられようとしているとのことであった。特に、パン・ギムン国連事務総長と国連の協力を得て力を入れているのがアフリカ諸国の開発援助であり、キム理事長ご自身が数ヶ月間アフリカに現地滞在して、地域開発に尽力しているとのことであった。また、慶雲大学校は、農村であった亀尾市の工業都市化（セ・マウル運動）に応じた人材養成機関としての役割を持っていることも教えていただいた。

## 4 小学校下校風景にみる韓国の教育事情

12日の夕方に慶雲大学校をあとにして、一路釜山に向かった。13日は釜山で自由行動であった。この機会を利用して、筆者は二つの場所を見学したいと考えていた。一つは生涯学習館または自治センター、もう一つは小学生の下校風景である。残念ながら、一つ目の生涯学習館と自治センター

の見学はできなかったが、二つ目の下校風景をみることはできた。なぜ、下校風景を見たかったのかといえば、そこに韓国の教育事情をかい間見ることができるからである。その教育事情とは、日本以上に進んだ韓国の学歴社会である。例えば、日本の高校生の大学進学率は約50%であるが、韓国は70%弱である（ただし短大・専門学校を加えると日本は70%が高等教育機関に進学する）。韓国は、日本以上に大学に行かなければ普通に就職できない、さらにより上位校でないと良い就職先はないと考えられており、社会の教育熱は非常に高い。

筆者が見ることができたのは、釜山市の旧市街地にある公立の小学校の下校風景である。その小学校の校門の道向かいに1階に駄菓子屋のあるビルがあった。そこに入れ替わり立ち代わりに10人ほどの子どもがやって来て時間を過ごす。一見すると何の変哲もない風景である。というより、むしろ筆者の子ども時代にも校門側に駄菓子と文房具屋があったことを思うと懐かしい気がした。だが、それは保護者と塾の送迎を待つ子どもたちの姿だったことにすぐに気づいた。韓国の小学生のほとんどは放課後に塾や習い事に行く。ビルをよく見ると、各階に美術教室、数学塾、英語塾などの看板が掲げられている。実はその隣のビルにも塾が入っていた。駄菓子屋は塾や習い事に行くバスを待つ子どもたちの集合場所だったのである。

子どもたちは次々にやってくるマイクロバスに乗り込んで塾や習い事に通っていった(写真3)。写真には保護者が写っているが、もちろん行くのは子どもだけである。ただ、かなりの数の保護者が小学校と家までの道を送り迎えしている。学校の通学区域は日本とかわりないか、都市部ではむしろ通学区域は日本より狭いところも多い。例えば、韓国の都市部では数千戸の大規模マンションができるとそこに小学校が設置されることが多く、家から学校までの距離は短い。

ではなぜ距離が近いのに保護者が子どもの送り迎えをするのか。今回、通訳をお願いしたカン氏は、「韓国で子育てする場合、塾や習い事などの教育費が多くかかるため、多くの家庭では子どもは一人だけ。子どもを狙った犯罪が起きると、保

護者は心配してたった一人のわが子を守るために送り迎えをする」とその理由を話してくれた。ちなみに、カン氏自身は年収が一千万円以上であり、日本の感覚では裕福な家庭であるが、「十分な教育を受けさせるために、子どもは二人しか産めなかった。十分な教育？例えば、私の娘は小学校一年生の頃から毎日塾と水泳とピアノのレッスンをさせた。でも有名なピアノの先生の個人レッスンは受けさせられなかった…。今は韓国国内で10番目ほどのランクの大学（ソウル市内の大学を除くとトップ）に通っている」と語ってくれた。



写真3 習い事の車が子どもをピックアップ

進学目的の私立の小学校の下校風景は「さらにすごい」という。「大型バスでまとめて中心部の有名大手進学塾に子どもをピックアップしていき、より裕福な子どもはタクシーか保護者の車で帰り、家庭教師のマンツーマンのレッスンを受ける」とのことであった。経済的成功を目標とした過剰な教育による子どもの発達の歪みが気になった。

日本の滞在経験も長いカン氏は、日本と韓国の社会事情には一般人よりは詳しい。彼女は終わりがけに次のように語った。「韓国は大卒者でも仕事が無くなってきている。日本もそうだが、韓国の場合、受験・就職競争はより激しい。いつも娘にしっかり大学で勉強しなさいと言っている。」

過度な受験・就職競争の裏側には、韓国経済における労働需要側の変化(安定企業・職種の縮小、中途採用増加など)、供給側の過剰(大量の大卒者)という需給ミスマッチを生み出す経済構造が

一つの大きな要因としてある。そして国内の経済構造はグローバルな経済競争に規定されているため、受験・就職競争の弊害を解決するのは非常に困難である。

韓国の競争は、日本からみると過剰に見えるかも知れない。けれども、韓国の現状は、将来の日本の姿のようにも重なるように思われる。これまで日本でも大都市部を中心に受験競争は加熱してきたが、昨今ではさらに地方までその傾向が現れている。秋田の国際教養大やアジア太平洋大学のように、地方でグローバルエリート養成教育(人材争奪)が始まっている。大学だけではない。過疎地や地方の小学校が特区化してエリート養成を行う試みも始まっている。かつて日本国内に限られていた競争は、もはやグローバルな経済競争の中で生き残るための教育競争(自らだけはグローバル企業に選んでもらうための競争)に変わってきている。今回、その傾向が露骨に現われている韓国の教育事情をわずかであるが見聞きすることで、日本の教育の将来を少しだけリアルに感じる事ができたことはよかった。

## 5 大学施設の見学と学生同士の交流

今回の韓国訪問目的は、地域社会研究センターが両大学と研究交流を始めるに当たっての最初の表敬訪問であり、その意味では、様々な関係者と出会うことができ、コンタクトをとりあえる関係づくりの一步目を踏み出せたことは非常に有益だった。

ところで、研究交流の目的と直接関係しないが、今回の訪問では大学教員として有意義な機会となったことを最後に記したい。その一つめは大学施設の見学である。大邱科学大学、慶雲大学校はともに最新の優れた教育研究施設を有していたが、ただ単に設備が素晴らしいだけでなく、それらを地域住民へ開放すること、社会貢献に役立てることなど、施設設備が大学設置基準や大学経営の目線からだけでなく、社会や学生の目線からしっかりと位置づけられていることである。一例として大邱科学大学のパン職人養成課程を挙げ

る。同課程にはパン工房とカフェテリア（共に学内）があり、所属学生が焼いたパンをカフェテリアで低価格で提供するという実践的教育を行っている（写真4）。



写真4 大邱科学大学のカフェには学生が焼いたパンが並ぶ

だが、工房とカフェテリアは教育施設であるだけでなく、学生のアルバイトの場であり、カフェという学生や地域住民の憩いの場であり、さらに売れ残ったパンは提携した地域の児童施設に提供するという地域社会貢献の場となっている。大学の施設設備が社会や学生の目線から多角的に位置づけられて機能している。このことを見学できたことは、大学教育に携わる筆者にとって非常に有意義であった。

二つめは学生同士の交流についてである。別府大学人間関係学科10名の参加学生は1年生が主体であった。韓国語もほとんど話せないため、内心は「本当に交流できるのだろうか？上手く交流ができなくて韓国が嫌いにならないか？」と心配していた。現在、日韓関係がぎくしゃくしていることも筆者の心配に拍車をかけていた。だが、結論から言えば、私の心配は全くの杞憂に終わった。両国の学生はほぼ半日か1日しか過ごしていないが、とても深い交流を行っていた。大邱科学大学の学生との交流では、夕食の焼き肉とカラオケを通じて、お互いに片言の単語で話しかけ、通じ合う度に気持ちを通じ、翌日の別れ際には互いに号泣しあうほどの関係になっていた（写真5）。慶雲大学校福祉学部の学生との交流では、「福祉」

についてではなく「恋愛」談義で盛り上がった。三日目の釜山散策時には、わざわざ大邱科学大学から学生二名が学生のガイド役で駆けつけてくれ、深夜まで語り合っていた。そうした学生の姿を見て、自分が心配していたのは学生ではなく「（本当は）自分が交流できるのか？」という心配であること、学生の力を過小評価していたことに気づき、そうした自分を大いに恥じた。それとともに若い学生の力を非常にたくましく感じた。人間関係学科の教員として、今回は彼らの交流の力がより発揮できる海外研修旅行にしていきたいと思った。



写真5 大邱科学大学学生との別れ

末尾になるが、このような貴重な機会をいただいた両大学、別府大学の関係者の皆様に心より感謝を申し上げたい。

（参考文献）

脇田滋「韓国における雇用安全網関連の法令・資料（3）：青年失業解消法・青年雇用促進特別法」『龍谷法学』第46巻第2号龍谷大学法学会 2013